



かどや通信

第11号

発行日：平成28年3月

発行：かどや保存会

発行責任者：清水 久行／編集：廣野 克子

小学生がやって来た！ かどやでお勉強

鳥羽小学校の三年生三十七名が二月十日、社会科授業の一環でかどやにやって来た。



ない生徒たちを驚かせた。その後、生徒たちは自由に歩きました。

一行が到着すると、かどやの所蔵品調査を担当した教育委員会文化財専門員の野村史隆さんが、かどやの概略を説明し、江戸時代から戦前まで使われていた生活用品の数々を紹介した。糸車は、この日のために綿花まで準備し、使い方を分かりやすく解説。続いて、ボランティア・スタッフ(文化研究員)のカヨさんが、たらいと洗濯板を使ったかつての洗濯を実演し、洗濯機しか知ら

わり、見慣れないものを見つけると、野村さんやカヨさんに「これ何?」「どうやって使うん?」等と質問していた。

また、明治時代に作られた築山(山に見立てた傾斜のある庭園)が気に入った生徒達が築山を駆けまわり、先生に叱られる場面もあった。

また、当日参加できなかった生徒が週末にお父さんと来館。たまたま出勤していたカヨさんから、昔の生活用品等についての説明を聞く熱心な生徒もいた。

さらに、かどやが気に入ったとお母さんや友達を連れて来てくれる生徒さんもいて、かどやのスタッフを喜ばせた。

同校のかどやでの授業は今回が二回目だが、担任の中井先生は「授業の内容にあった道具等を実際に見て触ることもできるので、とても参考になります」と話してくれた。当日の感想文は全員分ご紹介したいところだが、紙面の都合により重見君のを紹介させていただく。

かどや見学 重見 かずき

まずはじめに、目にとまったのは、きれいなステンドグラスでした。ステンドグラスは赤、緑、水色でそれ

が光に当たって、ゆかに色がうつって、すごくきれいでした。

たくさん昔のものをを見せてもらいました。心に残ったものは二つあります。一つ目は、糸車です。かどやの人にいっしょにもつてもらって回しましたが、それでも重かったです。「カラカラカラ」と、小さい音がしました。糸車を見て一年生の時に学習した「たぬきの糸車」を思い出しました。昔の人は糸をつむぐのも大へんだったんだなあと思いました。

二つ目は、長おオルガンです。今のオルガンは、けんぼんをおすだけで音が鳴るけれど、長おオルガンはペダルを何回もふまないと音は鳴りませんでした。空気を入れて音をだすところは、けんぼんハーモニカにいてると思います。きれいな音で心にびびきました。

いろいろな道具を見ただけれど、昔は今より大へんだけど、昔の人は電気やガスなどを使わなくてもちゃんとしたくらしが出来たんだなと思います。でも、今は電気やガスがないと使うことができません。昔の使い方もおぼえておくと、てい電やさいがいの際にべんりだと思えました。

鳥羽高校奮闘記！ かどや塾でエール贈る

第二十七回かどや塾「頑張る鳥羽高！奮闘記」が二月十三日に開催され、鳥羽高校の卒業生等や地元の方など約二十名が参加した。

創立百年を超える鳥羽高校は現在、南勢地区唯一の総合学科高校だが、少子化等の影響で生徒数減少という厳しい現実に向き合っている。

しかし、中川校長の指揮のもと、さまざまな打開策を講じて奮闘中だ。そこで、その奮闘ぶりを卒業生や地元の方々に知っていただき、応援しようと企画された。

まず、中川校長が現状と課題を話した後、打開策として魅力ある総合学科高校に向けて「観光ビジネス」や「総合福祉」など四つの系列にまとめ、さらに体験を重視した「鳥羽学」「地域研究」「マリンスポーツ」



など鳥羽ならではの科目を設置している取組を紹介した。その一環として「地域研究」では「とびっこ

クラブ」を作り、鳥羽の魅力を全国に発信する活動を行っている。昨年は「第七回全国高校生観光プランコンテスト」の本選に進出し、優秀作品賞として毎日放送社長賞を獲得するなど、地元を盛り立てる活動を積極的に展開している。かどやでは一年生ととびっこクラブの三人がスクリーンを使って活動の一部を再現。その熱演に、日頃鳥羽高校の活動を知る機会が少ない卒業生等から温かい声援が贈られた。

江戸期から現代まで 時代を超えたお雛様づくし

今年も「かどやのお雛様」展が、二月四日から三月七日まで開催された。

段飾りのお雛様は、江戸、明治、昭和初期、昭和中期のもので、時代によって、顔つきや着物が異なっているのが興味をひく。

江戸時代のもものは、当時鳥羽で青果商として財を成した木場家(屋号「土路屋」・伊勢の東豊浜土路地区の野菜を販売していたため土路屋と呼ばれた)のもので、うりざね顔



で目が細かいのが特徴だ。明治のものは、かどや(廣野家)の御殿雛(右の写真)、昭和初期は、酒

蒸饅頭で繁盛していた浦田家(屋号「武蔵屋」)のものが飾られている。

昭和後期のお雛様は志摩市の方から寄贈されたもので、それ以前のものと比較すると目がぱつちりとしていて、美しさの基準の変遷も伺い知ることができる。

現代の手芸雛は、一月にもあてやかな新年の作品を披露してくれた四ツ葉会(代表・野村輝代さん)の作品で、陶雛や、古布等を利用した貝雛、お手玉で作った愛らしいお雛様など種類は多岐に亘る。また、かどやでは初となる吊るし雛は玉城町の山本さんと吉村さんの制作で、精



巧な作りが注目を浴びた。かどやのスタッフは「展示数はさほど

多くはありませんが、時代を超えた様々なお雛様を楽しんでいただけます」と控えめながらやや得意げに話してくれた。

フチお雛様ロード

かどやにはこの他にも寄贈されたお雛様があるが、館内に飾りきれないため、今年は三丁目から四丁目界隈の商店の店先や個人の玄関をお借りして展示した。

三丁目中之郷会館を起点に、四丁目の大形宅、松井酒店、海童工房魚寅、山本宅に加えて、靴屋、中村松兵衛商店、イツミが自宅のお雛様を店先に飾ってくれた。

ポップと離れて点在しているものの、点を結べば「フチお雛様ロード」とも呼べる華やかさが生まれた。

かどやに寄贈されたお雛様の飾り付けは、清水館長が近所の助けを借りながらも、ほぼ独力で完成させたもの。清水館長は「まだまだご家庭に眠っているお雛様があるはず。来年は、もっと多くの方々のご協力をいただき、楽しいお雛様ロードを作っていきたいです」と、すでに来年に想いを馳せている。

民力光る力作、続々登場

かどやでは毎月、アマチュアの方々の多様な作品を展示しているが、市民力の素晴らしさが伝わる力作揃いだ。昨年、紹介しきれなかった展示の一部をご紹介します。

「匠の篆刻アート」

「海上明月〜高潤生と東方鳥羽金石会 作品展」は、九月十九日から十月十九日まで開催された。

東方鳥羽金石会は、書道家・高潤生さんから篆刻・篆書を学んでいる鳥羽市生涯学習教室のグループの名称で、受講生十一名と高先生の力作が



る漢字の篆刻に留まらず、平仮名や片仮名を融合したかな篆刻を創作。さらに、かな文字を抽象画風に表し色を加えた新しい文字アート「現代印作」も開拓



して国内外の注目を集め、篆刻芸術の国際的発展と交流に寄与している。

高さんの作品は、第六十二回式年遷宮記念として建てられたせんくう館開館時に奉納された「天地開闢」の文字が書かれた堂々とした屏風をはじめ、五メートルの伊勢和紙に印刷された優しい色合いの現代印作等、芸術性溢れる篆書や篆刻が並び、見学者を圧倒した。

さらに、高さんや出展者の皆さんの指導のもと、年賀状や書画に使う印の作り方を体験できる「ワークショップ篆刻体験」や、高さんが講座

生の作品や自身の作品を解説するギャラリートークも行われ、篆刻の魅力を知る絶好の機会となった

篆刻体験

では、高さんの巧みなリードによって初心者とは思えない仕上がりに、参加者たちは大満足。「一度体験したかったので、とても楽しかった」と自作の印鑑を大事そうに持ち帰った。



精巧な作りにため息も！ ひょうたん工芸と伊勢型紙

ひょうたんに絵を描いたり透かし彫りをしたりする珍しい作品も登場した。ひょうたん工芸にいそむ鹿市在住の水岡定夫さんが新聞でかどやの存在を知り、連絡をいただいたのがきっかけで実現したのが「二人展：ひょうたん工芸と伊勢型紙」だ。作品に使うひょうたんは、水岡さん自らが育てており、鈴鹿市

内にまちかど博物館「我楽多瓢筆工房」を設けて常時約百点を展示している。今回は、和紙に描かれた絵を貼って作った作品など、獨創性溢れる作品が並んだ。

伊勢型紙

は、水岡さんと同じ町内に住み水岡さんとは三十年来の友という田中清和さんの作品だ。完成に一ヶ月以上を要するものもあり、緻密さと根気が要求されるが、歌川広重の「東海道五十三次」を含む精巧な作品六十二点が出展され、見学者のため息を誘った。



古布きりぎりすとよみがえる 魔法の手を持つ女性たち

着なくなった和服等を使って、まるで魔法にかけられたかのようにミニ着物やタペストリー(壁掛け)、人形等にリメイクされて見事によみがえった作品展が続き、手芸好きの女性を魅了した。

思い出ついで

「飯田久美子パッチワーク展」が十月二十二日から十一月九日まで開催された。二メートル四方の大作「熊野古道」をはじめ、お母様の花嫁衣装を使った古風で大胆なタペストリーや日本の四季の美しさを表現したものなど、どれも飯田さんの卓越したセンスが光るものばかりで、見学者のため息を誘った。



十一月七日には、かどや塾「お手玉とサンタのオーナメント作り」も行われ、十四人が参



加。飯田さんは一人ひとりに丁寧に説明してまわり、終始和やかな空気が流れていた。参加者からは「楽しかったわ。先生、またこういう教室やっつてえな」と継続を希望する声も多く寄せられた。

ほのぼの

日本の原風景が蘇る

ほのぼのとした日本の原風景を思い起こさせてくれる人形展も開催された。NPO災害ボランティアネットワーク鈴鹿の理事長としても活躍している南部美智代さんの作品展で、「古布人形展」と題して十一月十六日から十二月二十五日に開催された。

南部さんは、そもそもは古くなった和服を再生させようとしてミニ着物に仕立てなおしていたが、そこにも端切れができてしまったため、端切れもすべて活用したいと思い立ち人形を作り始めたそうだ。

今回は、昭和中期頃までは自宅で行うのが一般的だった結婚式を古布人形で再現したものと、「のうのう人形」と名付けられた、どこことなくユーモラスな古き良き時代の田舎の人々を表現した作品が展示された。

どれも見ているだけで心がほっこりする人形達の表情や仕草に「こんな人おったなあ」と見学者の会話も弾んでいた。



結婚式の料理を手伝うご近所さん達

なお、結婚式の人形達は昨年九月にイタリア・ミラノで開催された「日本の祭典」にも出展され大喝采を浴びたそうだ。

リース作りは飛び入りも!

第二十四回かどや塾「まこちゃん」とリースを作る」が十一月二十九日に開催された。講師は、昨年六月に杉玉を作ってくれた手先が器用なまこちゃん(野村真さん)だ。

土台となる藤蔓は、まこちゃんが裏山から切り出してきてくれたもの。その藤蔓に好みの造花を差し込んでいくのだが、色合わせが案外難しい。「ああでもない、こうでもない」と言いながらも楽しそうに作業が進む。定員は十二名で会場の台所は満員状態だったが、たまたま津市から見学に来られた女性四人がリース作りを見て、足が止まり、「私たちも参加できません?」。まこちゃんに相談すると、材料に余分があるからと、廊下に席を作り、急ぎよ参加することになった。



作品が完成すると、全員大満足の様子で、飛び入り参加の四人も「楽しかったわ」と、作品を大事そうに抱えて帰って行った。

